

日進月歩するデジタル製品を、「使い勝手」ではなく、「実装された新技術」と「製品の革新性」をテーマにレビューしていくコーナー。インプレスのシンクタンク、インターネット生活研究所の研究員が実際にテストしてレポートする。

インプレス インターネット生活研究所
黒田 純一

PSX DESR-7700

(ソニー)

進化系のHDD搭載DVDレコーダーはお茶の間での話題を演出する

複雑な作業もリモコンのみで簡単に操作できる

テープが主流であった数年前までは、家電製品の中でもビデオの録画は複雑な操作の代名詞となっており、予約録画にまつわる失敗談は枚挙にいとまがなかった。それを解消するために生み出されたのが、今の新聞のテレビ欄にすっかり定着しているGコードで、各ビデオデッキメーカーが続々と採用していった。

家電製品の革新が進み、お茶の間のテレビの下を占める機器がDVD/HDDレコーダーになり、現在の録画予約時に主流となりつつあるのが、電子プログラムガイド(EPG)である。EPGはインターネットやデータ放送で提供されており、そこで番組を選択して録画予約を行うというスタイルだ。だが、それでも録画予約の難しさが、すべて解消されたわけではない。毎日放送される帯番組の予約や不定期に放送される番組、スポーツ中継の延長による時間のズレなど、操作の複雑さとは別にTV特有の事情による録画の失敗もあるからだ。

そこで新しいPSXでは、そういった複雑さを少しでも減らすために、自分好み

の番組を番組予約だけでなくジャンルやタレントの名前をキーワードで登録することによって自動的にHDDに録画する機能を搭載した。録画された番組は、興味があればそのまま見ればよし、なければあとから削除するだけだ。このプログラムは、そういったユーザーの行動から嗜好を自動的に学習し、録画予約に反映する。EPG上で生じる、番組名やタレントの名前の「表現の揺れ」も独自の辞書で解析する。特に、深夜帯などの番組名がスペースの都合で省略されたり、放送時間が頻繁に変更されたりするような場合にも、独自のアルゴリズムによって自動追跡してくれる。こういった作業はユーザー自らで行うと複雑で面倒な作業だが、それを覆い隠してシンプルな操作性を実現している。

さらには、録画したものの見る時間がないというユーザーには、メモリースティックにダビングして通勤電車内でPSPで視聴するといった選択肢もある。

ゲーム感覚の独自機能は、ライバルへの差別化になるか

その他の機能においても、PSXは「簡

単である」ことに重点が置かれている。

メニュー画面には、子供でも操作ができるシンプルなGUIである「クロスメディアバー(XMB)」が搭載されている。その後のソニーのプロダクトでも、ケータイだけでなく家電製品であるテレビ「WEGA」など、続々と採用されている。

さらにHDD搭載DVDレコーダーとしては異色のソフトウェアも搭載されている。これらは、単にTV番組を録画するだけでなく、ゲーム機から派生したPSXならではの独自機能と言えるだろう。

たとえば、「x-Pict Story」を使えば、運動会や遠足といったイベントの写真を簡単に編集できる。ゲームのために子供たちが集まっているところで、PSXがオリジナルの曲に合わせてズームやスクロールといったエフェクトを加えたフォト作品に仕上げることもできる。この作品をDVDに記録して、子供たちに配ることも可能だ。もちろん、結婚式や旅行の記念写真から独自の作品を作成すれば、大人同士でも楽しめる。

これまでPSXは、ゲーム機なのかDVDレコーダーなのかをはっきりしない、中途半端なプロダクトと言われ、マニア向けの製品として扱われてきた面がある。しかし、新型のPSXに搭載された機能を吟味すれば、決してマニア向けではなくリビングルームに置いて一般家庭向けの魅力を持つ、新しいプロダクトを目指したものだと言える。今後のさらなる進化が楽しみだ。

[Reviewer's View]

PSXというプラットフォームは、「x-アプリ」によって、PS2をベースにしたゲーム機器の延長線上ではなく、他のDVDレコーダーとは一味違った機能を提供している。特に「x-Pict Story」は、自分で作品を作る楽しさを感じさせてくれる。今後、作品をDVD化するだけでなく、ネットワーク機能を利用して友達同士で作品を交換する機能なども期待される。また「x-おまかせ・まる録」機能の充実度を考えると、テレビの視聴形態が変化するなかで、番組制作サイドにもEPG情報を作成するうえでの工夫が必要かもしれない。

書き込み型DVDドライブを搭載し、HDD容量は上位機種で250Gバイトあり、標準で107時間、最大325時間の番組を録画できる。ビデオの編集機能として、MPEG2のGOP単位で指定した区間の消去や、チャプターマークの追加・削除を設定し、DVDに最大36倍速で書き込む。IEEE1394端子(DV入力)にはビデオカメラを、USB端子にはUSBキーボードを接続することも可能だ。またイーサネット端子を持ち、インターネット経由でソフトウェアを簡単にアップグレードできることも大きなポイントだ。



直線主体のスクエアな形状に、全体を白でまとめたデザイン。プレイステーション2や他のソニー製DVD/HDDレコーダーとは大きく印象が異なっており、これがまったく別の新しいコンセプトに基づいた製品であることを象徴している。



前面のフロントパネルを開けると、プレイステーション2でおなじみのメモリーカードスロットに加えて、i.LINKとUSB、そしてメモリースティックスロットが見える。背面には各種のAVコネクターに加えてイーサネットポートとゲームコントローラーのコネクターがある。

AIWA XDM-S710BT (ソニー)

通信における固定・移動の融合を 現実的なものとして予感させる

MP3 プレーヤーが、Blue- tooth ヘッドセットプロファイ ルを取り込んだ

2004年のCEATECにおいて、NTTドコモのブースの真ん中に携帯電話でない製品が参考出品され、注目を浴びていた。AIWAブランドのフラッシュメモリープレーヤー「XDM-S710BT」である。

ケータイを持ち歩く場合には、バッグやポケットの奥深くに入れておくことが多くなったため、着信を取ることができなかつたり、そもそも着信に気がつかないこともあったりすることもある。そんな場面で、この「XDM-S710BT」が威力を発揮する。Bluetooth対応の携帯電話とあらかじめ連携させておくと、音楽を聞いているときに、接続しておいたケータイに着信があると、自動的に音楽がフェードアウトして着信音を鳴らして、本体の液晶画面に相手方の電話番号を表示する。そこでプレーヤー本体の「Talk」ボタンを押すと着信をキャッチでき、ヘッドホンとプレーヤー内蔵のマイクを通してハンズフリーでの通話ができるのだ。

Bluetoothには、接続するデバイスによってプロファイルやバージョンが複数存在するが、「XDM-S710BT」が対応しているのは「Bluetooth ver.1.2のハンズフリープロファイル、ヘッドセットプロファイル」となっている。とすれば、ケータイ以外のデバイスでも利用できる。ウィンドウズXPを搭載したノートPCにブラネックス社製の「BT-02UD2 (*1)」というUSB接続のBluetoothアダプタを接続し試してみた。付属のソフトウェアを利用して

ケータイと同様に「XDM-S710BT」に接続すると、ウィンドウズ上では「Bluetooth Audio」という名称のサウンドデバイスとして認識された。接続が始まるとプレーヤー本体の液晶画面には「CALLING」と表示され、「TALK」ボタンを押すと「TALKING」となって、ヘッドセットとして動作する。これにより、PCでも十分に活用できそうだ。

通勤中も、デスクワーク中も、 常に身に付けられる意味

FMC (Fixed-Mobile Convergence : 固定・移動通信の融合)は、利用者は常に同じ端末を持ち、外出時にはケータイ回線を、自宅や事業所などでは固定回線を経由して通話することで、自由に移動できるというケータイ回線と、信頼性が高くコストも低いという固定回線の良いとこ取りができるということで注目を集めている。

「XDM-S710BT」のように常に持ち歩くオーディオプレーヤーが、さらに電話番号のメモリー機能を持ち、着信時に相手の名前が表示されたり、電話番号を呼び出して電話をかけたりできるようになったら、どうだろうか。電話回線というインフラから、ユーザーインターフェイスの部分を切り離してしまい、ユーザーは常に1つのデバイスを持ち歩き、回線に何をを使うかは意識せずに通話したりメールしたりできる。ケータイの電話帳と同様の機能が搭載されたヘッドセット機能付シリコンプレーヤーが、FMCの実現を促進するというシナリオは十分に可能性がある。
(*1) <http://www.planex.co.jp/product/bluetooth/>



外形は88.6 × 24.6 × 24.3ミリメートルで、重さは約60グラム(電池込み)というサイズに、フラッシュメモリープレーヤーとBluetoothヘッドセットの機能が詰め込まれている。オーディオプレーヤーとしては、256Mバイトの内蔵メモリーを持ち、MP3のほかATRAC3plus/ATRAC3の再生が可能。音楽ファイルの転送は、パソコンとUSB 1.1で接続して付属の管理ソフト「SonicStage Ver.2.1」か、本体のメモリーに内蔵された「MP3 File Manager」で行う。

[Reviewer's View]

この「XDM-S710BT」の特徴は、なんとと言っても音楽プレーヤーとヘッドセットを組み合わせてしまったということに尽きる。Bluetoothという、自動車を運転するときのハンズフリー通話や、PDA同士でのデータ通信のイメージが強く、利用したくても現状では搭載するケータイも機種が限定されてしまうが、免許不要の無線通信機能さえあれば、Bluetoothにこだわることもなく、WiFiでもよいのである。本文でも述べたように、既存技術の組み合わせによる応用として注目すべきプロダクトではないだろうか。

ツーカー S

(ツーカーグループ)

機能や性能向上を続けていくケータイに、シンプルさで一石を投じる存在になるか

ケータイの高機能化とそこから生じるトレードオフ

2004年の11月に「説明書がいらなくらい簡単な通話専用ケータイ」というキャッチフレーズで「ツーカー S」が発売された。この「ツーカー S」には、デジタルカメラ機能はおろか、番号を表示する液晶ディスプレイさえもついていない。したがってメールすらもできないのだ。

メール機能は、ケータイの最大の使用目的であり、それをなくすとは、かなり思い切った製品だ。

翻って最近のケータイを見れば、PDAと比較しても劣ることのない高機能を持つまでに発展し、普及をとげた。しかし、高機能なケータイが実現した背景には、ハード部品の小型化をはじめとして、ソフトウェア開発、さらには大容量のバッテリーの開発に至るまで、さまざまな技術が注がれてきた。

しかし個人向け市場が飽和していく中で、法人向け市場も期待されている。日常業務を行う業務用ソフトウェアにおいても、ケータイのアプリとの連携を売りにしている場合も少なくない。このような中で、ケータイ事業者には、デザインや高機能化だけでなく、機能の取捨選択においても豊富なバリエーションを用意していく必要がある。

高性能なケータイの持つ危険性と個人情報保護法の関係

この4月から個人情報保護法が施行された。これを受けて、経済産業省からは

経済および産業分野を対象とした、企業内での個人情報保護に一定の枠組みを規定したガイドラインが公開されるなど、官公庁や企業を含めて動きが活発になっている。このガイドラインは、企業にとっての個人情報の有用性に配慮しつつ、その利用に関して保護とのバランスをいかにしてとるかを明確にして、消費者の不安を取り除くことを目的としている。

その結果、個人情報を取り扱う多くの事業者は、情報漏えいの防止を含めてさまざまな対策をとる必要に迫られるようになった。従業員が個人データの入ったノート型パソコンを社外に持ち出したために紛失してしまったといった、ニュースでよく聞くようなことがないように従業員を監督する義務がある。そのために、企業によってはあるデバイスが非常に問題視されるようになってきた。そのデバイスとは、ケータイだ。カメラ付きケータイの急速な普及は、個人情報保護の観点からもクリティカルな要素となっているのだ。

ケータイのように普及していつでも持ち歩いているようなデバイスさえも、書店などで勝手に本や雑誌を撮影する「デジタル万引き」と同様、ケータイに内蔵されている高解像度デジタルカメラによって個人データが撮影されて漏えいする可能性があるからだ。これまでも、重要な企業機密を取り扱う研究所のような施設では、カメラ付きケータイを持ち込めないとすでにあったが、多くの個人情報を扱う事業者によっては、普通のオフィスでもケータイの持ち込みを制

[Reviewer's View]

ケータイを難しさゆえに避けていた高齢層をターゲットに、簡単な通話専用を売りに登場した「ツーカー S」。しかし、内部から「個人データ」の漏えいを防止するため、カメラ付きケータイの持ち込みを禁止する企業が増え、またケータイに保存されたメモリーデータすら個人情報として意識しなければならない可能性もある。そんな状況においては、簡単なケータイとしてではなく、シンプルなケータイとして、ツーカー S が企業に採用されていくのではないだろうか。



ひたすら機能を切りつめた結果が省電力にもつながり、たった110分の充電で待ち受け時間では約840時間(約35日)、連続通話も4時間を可能とした。

電話帳メモリー機能や着メロといった他の機種では大きなアピール要素となる機能も省かれており、受話音量を大きくするためのスピーカや大型のボタンを採用しながら、87gもの軽量さを実現している。

限するところが出てくるだろう。そうなったとき、カメラを内蔵せず、またメモリーデータの保存すらできないツーカー S のようなシンプルなケータイを必要とする企業も確実に増えることが予測できる。

先の繰り返しになるが、今後のケータイには、単純な高機能化やデザイン性だけでなく、搭載する機能の取捨選択においても、さまざまな選択肢から選べるようになることが期待されている。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp